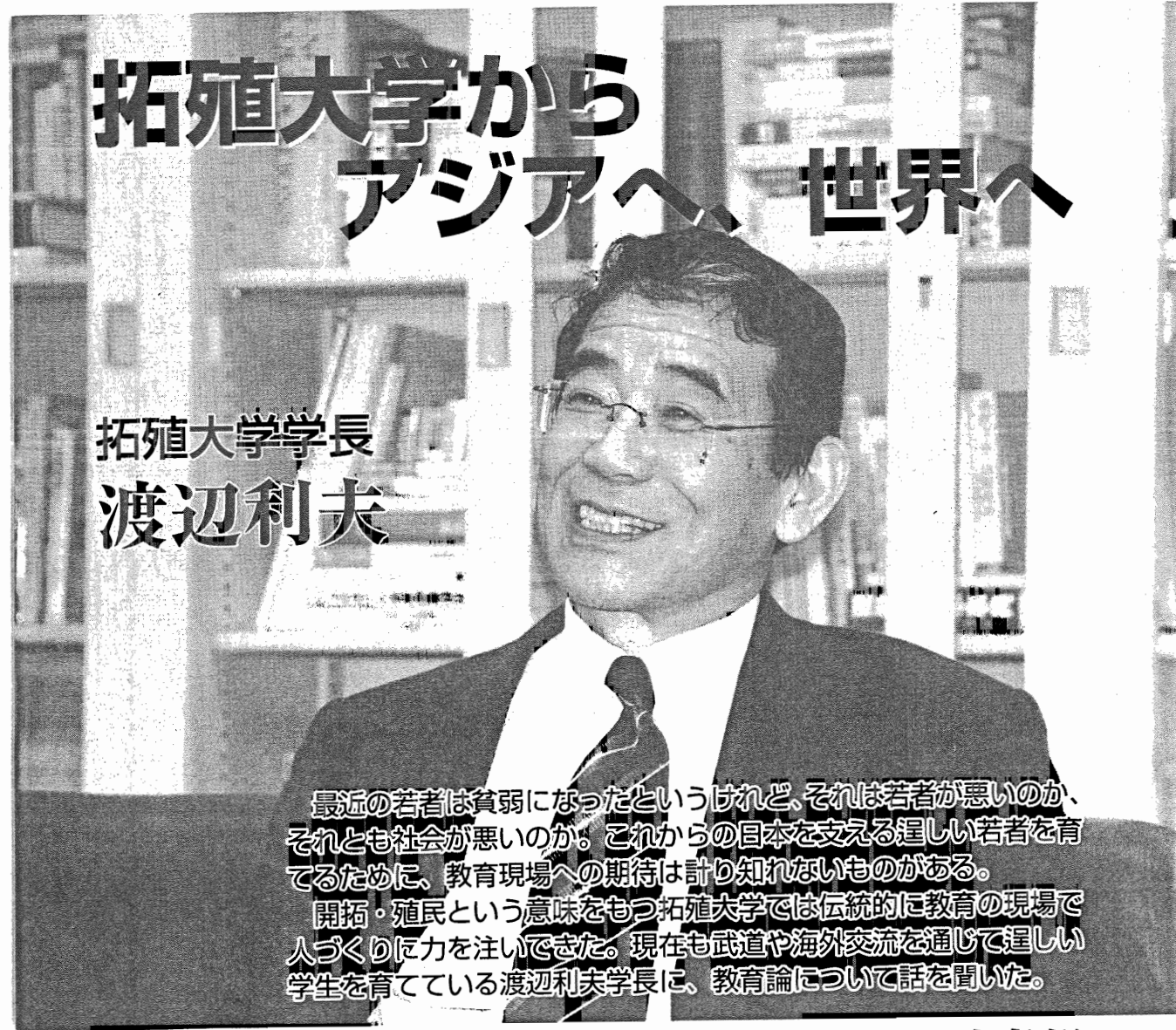


お借

民間なら詐欺事件 官庁なら詐欺にならず 緑のオーナー制度を救済せよ

日本を支える人材作り



最近の若者は貧弱になったというけれど、それは若者が悪いのか、それとも社会が悪いのか。これからの日本を支える逞しい若者を育てるために、教育現場への期待は計り知れないものがある。開拓・殖民という意味をもつ拓殖大学では伝統的に教育の現場で人づくりに力を注いできた。現在も武道や海外交流を通じて逞しい学生を育てている渡辺利夫学長に、教育論について話を聞いた。

聞き手——本誌主幹 田崎喜朗

スポーツ支援活動を始めた経緯

田崎 開校から100年以上の歴史をもつ拓殖大学ですが、創立の経緯はどういったものだったのでしょうか。

渡辺 かつて日本は日清戦争に勝利し、遼東半島、澎湖諸島、台湾の割譲を受けました。しかしロシア、ドイツ、フランスの三国干渉により遼東半島は返還を余儀なくされ、台湾と澎湖島が日本初の海外領土となりました。日本は開発のノウハウも知識も持っていませんでした。そこで桂太郎公が台湾の開拓と殖民、つまり拓殖のための若い人材の養成の場として台湾協会学校を開学しました。

台湾第四代総督・児玉源太郎の時代の民政長官であり、後に拓殖大学第三代学長となったのが後藤新平です。後藤は台湾の近代化に辣腕をふるった非常にスケールの大きな政治家でした。長い伝統をもち、その分しがらみも複雑な日本国内ではできない新事業を後藤は台湾を舞台に展開しました。

台北の総統府付近には、当時、後

拓殖大学学長 渡辺利夫

藤がつくった道路や建築物がきれいに残っています。高雄から基隆に至るまでの鉄道、港湾なども整備しました。また、不潔な未開の地であった台湾の衛生状態を改善し、司法、行政、何よりも教育制度を整備しました。当時の列強が行った植民地政策とはまるで違います。台湾の近代化のベースをつくったのは日本人なのです。台湾の本省人ならば李登輝前総統に至るまでそうおっしゃっています。

田崎 おっしゃるとおり、台湾は非常に親日的ですね。

渡辺 去年6月7日に拓殖大学に李登輝さんを招聘しました。一時間半ほどの滞在でしたが、玄関前にある桂太郎公の銅像に献花もしていました。私がこの3月末に台湾を訪れた時には、李登輝さんが日本に来たら行ってみたい大学は拓殖大学だとおっしゃっておられました。そういうご縁があるからでしょうね。

田崎 狭い日本から外に出て、大きく海外に飛躍することが建学の精神であったわけですね。

渡辺 そうです。第二次大戦後になりますと、ハワイやブラジルへの海外移住者が増えました。海外移住の先陣を切ったのも拓殖大学です。ブラジルには大企業の駐在員としてではなく、まさに草の根に入り込んで定任している拓大OBがたくさんいます。彼らはブラジル日系人とはよりブラジル人からも尊敬されています。

アジアではインドネシアに拓大OBがたくさん定着しています。2、3年で帰ってくるような駐在型の社員ではなく、現地で事業を立ち上げ、インドネシア人を雇ってそこに定住するというタイプの人々がかかり多く見られますね。そういう人々の中に拓殖大学の伝統が具現されています。

田崎 そういった伝統こそが今の日本で最も足りないもののひとつではないでしょうか。特に若い男性にはそういった気概をもってほしいと思います。

渡辺 私は開発論の専門家です。私が現場主義を貫いていることも少しは影響していると思いますが、貧しい国にこそ高い志が入っていて仕事をしたいという気分が、ことに国際学部の学生には強いのです。

東南アジアの最貧国である東ティモールを去年2月に訪れ、当時のグスマン大統領に名誉博士号を差し上げたのですが、その機会に現地でもボランティアとでもできるだけ密度高くボランティアを受けました。今は状況が不安定ですから難しいのですが、もう少し安定したらああいう本当に貧しい子供、病んでいる人たちが多くいる国で学生の研修をさせたいと思いますね。

今の学生も良いことをしたいという気持ちは非常に強くなってきています。しかし狭い日本には困っている人も弱い人もいるには違いないけれど、なかなか彼らの目にこれが入ってこない。そういう学生たちを例えばマニラで1ヶ月くらいホームステイさせ、現地の信頼できるNGOと組んで一緒にストリートチルドレンの世話をしたり、スモークマウンテンで子供会の活動に参加して彼らを善導するような活動に加わらせると、2割から3割くらいの学生はいい顔つきになって帰ってきてきます。何不自由なく育てられた学生たちが自分以外の第三者のために何かができたという誇らしさや晴れがましい気持ちになって帰ってくるのだ

げ、日本再建の中核としてはどうでしょうか。

渡辺 おっしゃる通りに、勇気とか勤勉とか謙恥とか、そういう徳目が日本から嘘のように消えてしまっています。でもそれらは武道の中に本質的な要素として組み込まれています。武道に励むことがその精神を同時に学ぶことにもつながります。武道の奨励はどうしてもやっていかなければなりませんね。

また、学生とは教員に教えられて成長するものと考えがちですが、実際には先輩や同級生の背中を見て育つことが多いですね。優れた先輩や同級生たちのようになりたいという具体的な目標が大事です。ですから武道に限らず、研究団体でも文化団体でも学生相互の緊密な組織活動は大変に重要ですね。

ちょっと驚かれるかもしれませんが、今の学生たちは組織というものを嫌うのか、本当に親しい友人の数が5人とか6人の範囲でしかない。それ以外の人間とはほとんど付き合いがないというのが今の大学生の平均像でしょうね。

例えば、私のゼミの学生は17名いますが、初めのうちは、お互いに名前を呼び合うこともありませんでし

と思います。そういう学生の多くがリーダーになりますね。バイトしてためたお金で現地に行き、同じように働いて帰ってきます。

田崎 拓殖大学ではそういったホームステイ支援を学部に関係なく行っているのですか。

渡辺 短期研修が中心です。現場で仕事をさせることで初めて生まれる、教室での勉強との相乗効果が非常に大きい。拓殖大学らしい教育の仕方だと思っています。

私は拓殖大学をこれからの大学教育のモデルにしたいと考えています。どこの大学にもあるように、拓殖大学も世界各地に姉妹校、提携校をもっているのですが、多くの場合は名前だけの存在です。

拓殖大学はインドネシアのダルマ・プルサダ大学とは姉妹校の関係にあります。両方で学生交流をやっていますが、私はそれだけではまだ不満です。両大学の学生と一緒に仕事をさせたい。そこで拓殖大学の教員とダルマ・プルサダ大学の教員が一緒になって貧困地域の開発に当たる事業を始めました。ダルマ・プルサダ大学はジャカルタの郊外にあります。ジャカルタの周辺部には出稼ぎに來ても働く職場のない人々が住

まっている居住区があり、そのコミュニティ・デベロップメントをやるとういうわけです。このプロジェクトに両大学の大学生や大学院生を参加させています。

JICA(国際協力機構)が、拓殖大学では面白い事業をしていると気づいてくれて、草の根技術協力事業に認定され、年間1千万円を3年間連続で出していたいただきました。年間1千万円といえば、インドネシアでは大変なお金ですから、一段と密度の濃い事業ができるようになりました。

そういう事業を通じて学生は大きに勉強し、ついには何人かの学生がインドネシア語検定の1級を取るほどになりました。送り出したときは本当に頼りなくて不安もありました。昔はインドネシアに行くのは大

学生は仲間の背中を見て育つ

田崎 昔から拓殖大学は武道が強い学校と記憶しています。これからのその伝統は受け継いでいかれると思いますが、一方で戦後の日本に最も足りない部分に、覇気や気概とい

った武道の精神があります。これはいくら教育改革をしてもすぐに身につくものではありません。ぜひ拓殖大学が中心となって、スポーツを通じて武道精神を鍛え上

た。あまりに他人に無関心なので、これは変えないといけないと思ひ、名前が入ったプレートをつくって机上に置き、議論の際には必ず名前を呼び合うようにしつけました。それを半年くらいやってようやく17人の顔と名前が一致するようになるという状況でした。私どもの大学時代は友達を求めて大学へ入ったというような感じがありました。今はそういうこともなく、人間関係が本当に薄く淡いんですね。

田崎 そうですか。体育会系は今でもそうかもしれません。私の頃は先輩、後輩はもちろん、同学年間の結束も非常に強かったです。拓殖大学には体育会系の学生をどんどん増やしていただきたいですね。

渡辺 ぜひ、そうしたいと思ひます。また、それだけではなく、武道を海外に広めていくための人材を養成したいと考えています。そこでどこかの学部の中に国際スポーツ専攻をつくり、そこに30〜40人、体育推薦の学生を入れようと思ひます。これには相当のレベルの学生を受け入れることにしたい。英語やインターネットなどの基本的なことに加えて武道の精神をたたき込みたいですね。

変でしたけど、今は安い航空運賃で簡単に行けますから、机上での教育と現場での教育をドッキングさせることができます。これなどは拓大精神に見合う教育方法だと私は思ひますね。


田崎 机上で終わらせない立派な人づくりですね。

渡辺 まさに人づくりです。拓殖大学の開拓・殖民という言葉が現代の状況の中で編集し直すと、次のようなことになるのだと思ひます。つまり私どもが、貧困で未開発の地域に入っていく、現地の人づくりに協力して富を生み出し、その富がその社会に回り始めることでそこに住まう人々が自立していくこと。そう解釈して、そのための協力で熱い情熱をもつ人材を養成していきたいと考えています。

その資格は十分あると思ひます。スポーツには国際性がありますから、スポーツを通じて日本の青年が海外の若者と交流するのは大事なことです。

田崎 スポーツ面において、ぜひ日本の大学をリードする立場に立っていただきたいと思ひます。

渡辺 拓殖大学にはかつてそういう時期もあったわけですから、もう一回ルネッサンスをやりたいですね。



渡辺利夫(わたなべ としお)
慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程(1970年3月)
経済学博士(慶應義塾大学1980年)

【主な職歴】
1980年4月 筑波大学教授
1983年4月 東京工業大学教授
2000年4月 拓殖大学国際開発学部(現:国際学部)学部長
2004年4月 拓殖大学大学院国際協力学研究科委員長
2005年4月 拓殖大学 学長

【所属学会・協会】
第17期学術会議会員、アジア政経学会(元理事長)、国際開発学会(前副会長)、国際経済学会(前常任理事)、国際ビジネス研究学会(前常任理事)、外務省国際協力に関する有識者会議議長【受賞】
吉野作造賞、太平正芳記念賞、アジア太平洋賞大賞、開高健賞正賞、JICA功労賞、外務大臣表彰

実践教育で政治家を育てる

田崎 昔の政治家はスケールが大きすぎて非常にたくましさを感じさせましたが、今の政治家はまるでサラリーマンのようです。今こそ質実剛健を旨とするこの拓殖大学からどんな国會議員が生まれてほしいものです。そこで学部の中に政治家をつくる専科をつくられてはいかがですか。

渡辺 実は今、そういう構想を私はもっています。私はいずれ道州制が成立すると思っています。地方分権の流れはもう止めることができませぬ。地方に優れた人間がいないと日本という国は成り立ちませぬ。日本は伝統的に分散型社会で、地方にたくさん優れた人がいたから明治維新にも成功したわけですよ。やはり地方が強くないと本当に足腰の強い日本はできない。地方の政治行政のための研究科をつくる構想をもっています。

地方の行政者を育てると同時に、地方の政治家も育てたい。地方政治行政研究科です。ここでは例えば、政治については選挙の仕方から始めてほしいと思っています。すでに茅原都生先生のようなきわめて優れた中国軍事学のプロフェッショナルも出ています。安全保障論はハードウェアをちゃんと勉強しないと話にならないというのが私の持論です。できるだけハードに強い人を集めて研究科を強化したいですね。

田崎 これは経営面でも非常に大切だと思えますし、特に国會議員の方たちにこういう勉強をしてもらわないといけません。この厳しい国際社会の中で日本のリーダーとなる人には、軍事学に対する基礎的な知識

り、スピーチ原稿の書き方などまで教えたい。また、現職の地方政治家を客員教授として呼び、授業をしてもらう。さらにインターン制度をつくって、政治家のオフィスで無償の仕事させてもらうといったことも構想しています。

田崎 非常にすばらしい構想ですね。具体的に政治家を志して選挙に出る人たちにとって、現在各大学が教えている政治学部の各学科は何の役にも立ちませぬ。そういった実践的な教育をしていただいて、拓殖大学から大いに質実剛健でスケールの大きな政治家を出していただきたいと思えます。

渡辺 私の理想は日清・日露戦争開戦前夜の日本の政治家たちです。彼らはピンポイントの判断ひとつ誤れば国が滅亡するというような過酷な状況の中で鍛えられた人たちですよ。開国維新期から日清・日露戦争に至るまでの政治家、オピニオンリーダーたちが何を論じ、どう行動したのかという、近現代の思想史を徹底的に学んでもらう必要があります。

渡辺 もうひとつ言えば、企業などのマイクロ分野の危機管理、それから地方自治体の危機管理を専門とするプロフェッショナルも育てたい。国家安全保障にはじまり、マイクロの自治体や企業の安全保障に至るまで、研究科を重層的に仕立てていくつもりです。もう単なる海外事情一般をひとつの研究所で引き受ける時代は終わりましたね。拓殖大学の「海外事情研究所」も森本敏先生の努力でそのような分野での実践的な分析家を育てています。

田崎 最後になりますが、今後の学校経営に関する抱負などを聞かせてください。

渡辺 私のキャッチワードに「東京大学や京都大学、早稲田大学や慶應義塾大学が変わっても日本は変わらないが、拓殖大学が変われば日本が変わる」というのがあります。拓殖大学の学生は日本の学生のいわば平均像ですが、平均像とはつまり数が多い。拓殖大学が変わればそれがモデルとなり、日本の大学の全

す。

戦後の左派的な思潮の中で、日本の近現代史はネガティブな価値しか与えられてきませんでした。日清戦争の時の外務大臣は陸奥宗光、日露戦争の時は小村寿太郎、その両方を支えてきたのが伊藤博文という稀代の政治家。こういう人たちの文献はすべて揃っているのに、それを本格的に教えるような政治学は日本の大学にはほとんどありません。政治学のパックボーンをつくりたい。

今の時代は北朝鮮のミサイル発射や核実験はもとより、台湾海峡で何が起ころうともわからない、中国は急速な軍拡を進めるなど、日清・日露戦争開戦前夜のような危機的状況が再現しつつあるように思えます。ひよっとするとあの時代よりももっと厳しい状況にあるのかもしれない。今の日本の政治の安穩たる危機感のなさは不思議なほどです。少し変化の兆しはありますけど、まだ兆し程度で、本当に変化したとは思えないですね。

田崎 それについて軍事学という学科を作ること考えたことはありませんか。世界の一流大学にはどこも軍事学を教える学科があります。

渡辺 実は拓殖大学の大学院には、単に偏差値で学生を求める時代は終わったと思います。やはり拓殖大学の建学の精神に沿うような、遅い人間に育てていくための大学像を世にアピールしたい。タフな学生を入学させ、育てたいですね。

私は学長就任以来、毎日のように教員に新入生教育の重要性を説いてきました。大学は社長命令で決まる企業と違い、教員の合意を積み上げていく時間が長かかります。2年を要しましたが、全学部の新入生全員を新入生ゼミに組み込むことに成功しました。時間はかかりましたが、かけるに値するテーマだったと思っています。1年生の前半期に学生の心をつかまないと、4年間をまっとうできません。逆にこの時期に心をつかむことで良い学生が多数生まれます。

1人の学生を入学させて卒業させるまでに必要な教員のエネルギーを仮に100とすれば、1年の前半にそのエネルギーの50を使ってほしいというわけです。

日本の小中高の教育が崩壊しています。大学に来てから今までと同じように1000のエネルギーを1年かけて4年まで分散的に使うというような教育をしていては、小中高の崩壊

国際協力学研究科があり、その中の一本の柱が私の研究している国際開発、もう一本の柱が安全保障です。実は安全保障を柱にした大学院の設置は不思議なことに日本では初めての試みなのです。

ここは茅原都生先生をリーダーにして、安全保障の専門家を非常に厚く集めているのですが、彼の下に同様の人がほとんど続いています。しかも拓殖大学は大川周明の伝統を引いて中近東や北アフリカの地域研究に強く、アラビア語で研究している人間が一番多い大学です。紛争地域が中近東に集中しています。地域研究と安全保障を相乗させた強力な研究科にしたいですね。

私の希望としてはこれに加えて中国、朝鮮半島の安全保障を研究する人間がもうひとつのスクールをつくらせたいですね。

それと同時に先ほどお話しした海外研修を組み込んでいきます。国際学部のケースでいうと、インドネシア、フィリピン、マレーシア、タイ、韓国、中国が研修先です。1年生のうち半分以上の学生が海外研修でアジアの国々と接触します。語学の面でも、一言も現地言葉がしゃべれずにホームステイをして困惑してしまい、帰ってきてからコミュニケーションがとれただけ大事故を自覚して懸命に語学の勉強をする。語学が伸びると、他の科目の成績も不思議なように一緒に伸びていきます。

こういうダイナミックな感覚を学生に与えることが大切です。その後は自然に自立していきます。そういう学生が定着して初めて大学経営も成功したといえるでしょうね。

田崎 今日は非常にいいお話をうかがうことができました。拓殖大学で育った学生が近い将来、日本を支えてくれる日が来ることを大いに期待します。本日はありがとうございました。



拓大が変われば日本が変わる

お目撃

早期解散総選挙が行われれば久間、赤城大臣他多数の落選は避けられず 対策本部が苦慮

